

Continue

























March 13, 2025 by Di-Zip This entry was posted in ONGOING 進行中, Raw Manga 一般コミック and tagged Cuvie (キュービー) on July 22, 2025 by jpraws.
2024年12月2日 19:50 本格クラシックパレエ漫画『緋爛たるグランドセーヌ』がチョーおもしろい。つまりはそういう話です。これがインターネットで天下をとれるポテンシャルを持ちながらインターネットで大バズり（※『K2』くらい）して毎分毎秒ファンアートが溢れてくる状況になってなあらず。26巻まで出ているので確固たる人気があるのは理解しているもの。このようなインターネットは間違っているという思いによって筆をどらせていたきました。元からの読者は「26巻も読んでいる人気漫画に今更な言ってるんだ」という感じかもしれませんが誰かい紙持ちで見守ってください。わかったか。そもそも『緋爛たるグランドセーヌ』が連載されてるチャンピオンREDといえはエロと暴力とニンジャな雑話というのがとにかく（真見がもしれません）『緋爛たるグランドセーヌ』には環装が一切なく、例えなら「コンプティークで連載されていたニンジャスレイヤー」に近い。つまりチャンピオンREDの読者層とちゃん一致しているの不安になる。逆に言えば読者層と一致してなさそうなのに26巻も読んでいるのでポテンシャルの高さが伺える。実は筆者もチャンピオンREDですと『ニンジャスレイヤー キョート・ヘル・オン・アース』を読んでいたが『緋爛たるグランドセーヌ』にノータッチでした。最近ふと「このチャンピオンREDの表紙になっている漫画なんだな」と読み始めてみたところあまりにも面白すぎて全巻買って3周くらいして今この記事を書いています。ありがとやチャンピオンRED。というわけでインターネットで天下をとる漫画『緋爛たるグランドセーヌ』についてご紹介。文字だけでは『緋爛たるグランドセーヌ』の魅力は伝えきれないため劇中のコマを張り付けていますが、怒られは発生した場合はすぐにこの記事を増補する準備が出来ます。多くの名作がそうであるように『緋爛たるグランドセーヌ』のあらすじに複雑なところははない。簡単に言えば「一人の少女がパレエの世界にのめり込んでいく」というものであり、シンプルであるが故に魅力は伝えるのは難しい。恐らくあらずしだけ読んでピンとくる人はあまりいないのではないと思う。だが、ちょっと考えてみてほしい。このシンプルなあらすじの作品が26巻も読んでいるという事実を。『緋爛たるグランドセーヌ』は「本格クラシックパレエロマン」と銘打ってある通り、本当にパレエの話しかしない。無駄を削ぎ落とした刃の切っ先のように、主人公・有谷奏がパレエに熱意を注ぐ姿を描いている。主人公に降りかかる試練は常にパレエにまつわる現実的な問題（学費やコンクール、コロナ禍）であり、いじめや悪の組織などわかりやすく物語を盛り上げるような理不尽は無いかわってこない。そしてこの「パレエやる。そしてプロを目指す」というシンプルで決断的な物語を支えるのは綿密な取材と豊富な知識、魅力的なキャラクター、洗練された漫画表現であり、読んでいて「基礎漫画力が高い……!」となる。そして基礎漫画力が高いが故に『緋爛たるグランドセーヌ』は王道漫画のように読めるが、実のところ王道から外れた道を行くかなり特異な漫画である。というものこそマンガ、スガ根にありがちな「人間ドラマやトラウマの克服によって才能を開花させ土壇場で大勝利」というカタルシスを徹底的に排除しているのだ。コンクール編で勝利を支えるのは「普段の練習でなにしてきたか」とはしく、それ以外のものは排除される。そのため人間ドラマのカタルシスによって技術の向上が顕微化されることはなく、主人公の成長が一步步、一歩ずつ、作者の豊富なパレエ知識を元に丁寧に描かれている。冒頭で筆者が『緋爛たるグランドセーヌ』を3周していると言いつたが、これだけ何回読んでも飽きないのはこの「人間ドラマの克服によるカタルシス」を排しているからではないかと思う。そして『緋爛たるグランドセーヌ』が特異なのが「人間ドラマやトラウマの克服によって才能を開花させ土壇場で大勝利」といったものを拒否する代わりに「主人公が悩みを抱え、辛い状態で踏った踏み」がコンクールで高評価されることだ。これが別の作品であったら悩みを抱えた状態とほぼ確実に失敗するのだが『緋爛たるグランドセーヌ』では奏自身「苦しかった」と述懐する踊りがむしろ周りは「ベストの踊りだった」と評価される。『緋爛たるグランドセーヌ』は特異な漫画であると評したがそれは「なにか一風変わった漫画を描いてやろう」と考えてそうなったのではなく「練習に裏打ちされた技術は人間ドラマによって簡単に揺らくことはない」という思想を一貫して描いているからだ。だからこそ『緋爛たるグランドセーヌ』は特異な漫画であり、同時に王道漫画のようにスリルと読めてしまうのだと思う。それから自分はずっと「漫画におけるダンス表現」が苦手だったのだが、こ『緋爛たるグランドセーヌ』のダンス表現には泣かされることもある。絵としては動的でない、むしろ静止画的な絵（この表現で合ってるのかわからないが）の連続なのだがそれが流麗で躍動感に溢れ、パレエの知識がなくともどのような流れの動き、どのような表現なのかが感覚的に理解できる。これが古典作品の振り付けならともかく、劇中のキャラクターが振り付けたオリジナル作品でも魅せるのがわがわがわかない。先述した「泣いた」という踊りも劇中のキャラクターが振り付けた『パエトーン』だったりする。そして魅せられるが故に、劇中のキャラクターが振り付け踊りを実際に見ることができないのが残念でならない。という劇中オリジナルの踊り、多分最初から最後まで（漫画で描かれてない部分まで）振り付けが決まっている気がしてならないけど、どうなんだろう。実際のところはわからないけどそう思わせる情報密度がある。そんな特異で王道な漫画『緋爛たるグランドセーヌ』でも唯一無二であり、特に面白いと思っているポイントがある。それが「嫌味なライバルキャラ」が出てきて奏のコミュニケーション能力が高すぎて一瞬でハチャメチャ仲良しになってしまうところだ。これが（『緋爛たるグランドセーヌ』13巻より）最終的にこうなる（『緋爛たるグランドセーヌ』23巻）これが「ライバルとバトルを通じて仲良くなる」とかならまあスポーツものによくあるのだが、『緋爛たるグランドセーヌ』ではちゃんとコミュニケーションを通じて仲良くなる。しかも速攻で、第一印象が悪い相手でも言葉が通じない相手でも気がつけば奏とメチャチャ仲良しになっている。劇中でも「コミュ力お化け」と評される奏だが、誰であれ速攻で仲良くなるコミュニケーション/無双ぶりは見えていて変な笑いが溢れてくる。「みんな仲良し」な作品はそう珍しいもないかもしれないが、こど速度において『緋爛たるグランドセーヌ』に勝る作品はないと思う。マジで速いので是非読んでみて欲しい。そしてこの「嫌味なライバル」キャラと速攻で仲良しになる、という独自性はパレエという題材でないと成立しないということも記しておくなければならない。パレエは舞台芸術であり、様々な競争はあるものの競技ではない。あくまで観客に魅せるためのものであり、周りにいるダンサーは一切疎略するライバルであると同時に共に至高の芸術を作り上げる同志なのだ。あと本作に出てくるライバル風味のキャラは第一印象がちょっと悪いだけでほとんど良い子なも忘れてはいけない。これは『K2』とかと同じで本気でパレエをやってるやつに悪事を働く暇はないんですよ。なので『緋爛たるグランドセーヌ』は『K2』以上に悪人が出てこない漫画だったりする。基本善性種くりリアル寄り医療漫画なのたたまにスーパー化して悪のテロリスト組織が出てくる『K2』のほががおかしい。『緋爛たるグランドセーヌ』にも挫折や試練自体あるものの、奏のコミュニケーション能力の高さと周囲のキャラクターの魅力によってカラッと爽やかなものにしてきている。「嫌味な感じで登場したキャラが速攻でハチャメチャ仲良しになる」は間違いなくこの作品でしか味わえない魅力です。そしてこの「嫌味な感じで登場したキャラが数話後にはハチャメチャ仲良しになる」の筆頭であり、この記事を書き始めた最大の目的であるキャラクターがいる。そう、奏のライバルである栗栖さくらだ。緋爛たるグランドセーヌ25巻の栗栖さくら。パチイク。（『緋爛たるグランドセーヌ』25巻表紙）『緋爛たるグランドセーヌ』をインターネットで天下をとれる漫画と呼んだが、栗栖さくらはインターネットで天下をとれるキャラクターである。今はそうではないが、いずれすべての人間が栗栖さくららの話をするようになる。栗栖さくらを一言で表すと”高慢で性根が屈折している上に目がほんのり死んでいて痛痛もちでパレエに対して強迫観念的なところがあるもの謎よりも努力家でパレエが上手い少女”である。彼女が本格的に登場するのは2巻からなのだが、嫌味ったらしさ全開で如何にも”らしい”雰囲気を持っている。主人公の踊りを見て「それなりに楽しめた。得るものはそんなになかったけど」と言う栗栖さくら（『緋爛たるグランドセーヌ』2巻）「…プロとが目指したいならさあ。もうちょっといろいろ知った方がいいよ」と言う栗栖さくら（『緋爛たるグランドセーヌ』2巻）余裕の笑みを浮かべながらちねちと嫌味を吐く栗栖さくらだが、パレエに前向きな気持ちを持つ有谷奏の存在が彼女の心をかき乱す。互いの主義主張が受け入れられないさくらと奏は、次のコンクールで勝負することになる（補正すると奏が「勝負」を口にしたのは栗栖さくらの時だけです）。マイペースな奏にかき乱され、しまいにキレる栗栖さくら（緋爛たるグランドセーヌ）3巻が、後のライバルキャラが例外なく同じ入浴をするように速攻で絆され、3巻の終わりには急に奏のことを「カナ」と呼び始める。距離の詰め方もかしくない?「あなたが大好き!」と同じ巻です（『緋爛たるグランドセーヌ』3巻）高慢で性根が屈折している上に痛痛もちで目がほんのり死んでいる人間が光属性の主人公に絆されるとどうなるか、もしあなたが百合に精通する読者であれば既におわかりたろう。栗栖さくらは作中でもぶっっっぎり奏大好き人間と化す。物語に出てくる大抵のキャラクターは奏のことが大好きだが（コミュカお化けなので）栗栖さくらはその中でも質、量ともに一線を画す。普段はつんけんして居るくせに自分以外の人間が奏と仲良そうにしている人間が奏と仲良さそうにしている姿に驚かすくらい泣いて、泣きながら奏が踊ってる動画を見る栗栖さくら（チャンピオンRED2024年10月号『緋爛たるグランドセーヌ』133話）すごい勢いで奏からの電話に出る栗栖さくら（チャンピオンRED2024年10月号『緋爛たるグランドセーヌ』133話）また、奏はコロナ禍で多くの公演が中止するさなか有志の学生ダンサーによる「オンライン・ガラ・コンサート」を企画する。奏の友人をはじめ各々が自分の踊りたい演目を提案するなか、栗栖さくらだけは「カナが自分に踊って欲しい演目」を真意荒く要求する。「カナが私に!」が強調されている（『緋爛たるグランドセーヌ』26巻）こんな感じでパレエにも奏にも全力な栗栖さくらがLOVELY（素晴らしい意）なんですよ。これに奏にとっの栗栖さくらは「常に自分の一歩先を行っている存在」なのが良い。良すぎる。本当に良い。わかるか。奏がプロの道を意識しはじめたのも栗栖さくらとの出会いがきっかけだったりするんですよ。あと栗栖さくらは奏から「さくらは強い子」と思われているのでそれを必死に守るために「強い自分」を演じているところがある。なので奏から電話が来るとすぐ泣くけど必ず涙を流してから出るんですよ。ビデオ通話ではないのに。そいいう。複雑なぬ……。思、わかるか?。この良さが、というか俺も栗栖さくらが世界中のインターネットで知られてないのはあまりにも勿体ないと思うんですよ。だって高慢で屈折してて目が死んでいるけど光属性の主人公にウツとなっているキャラがインターネットで毎分毎秒語られていないんですよ!!!!!!『緋爛たるグランドセーヌ』は百合漫画ではないが、栗栖さくらが出てくる期間は百合漫画指数が5000000座くらいになる。しかし忘れてはいけないのが『緋爛たるグランドセーヌ』はパレエに本気でやる漫画ということだ。それそれがパレエに対して真摯に向き合うが故に奏とさくらは別々の園の(パレエに留学してしまふ。なので栗栖さくらのお出番は「たくさんある」とは断言できない。とはいえ栗栖さくら単独回は結構あるし、逆に言えは『緋爛たるグランドセーヌ』は栗栖さくらほどクリエイティブなキャラクターを出さずとも高水準の面白さを保つことのできる漫画なのだ。なにはともあれ「かけきしょうじょ」の野鳥聖が好きな人は栗栖さくらが好きだと思っし、出てくる度に絶大なインパクトを残してくれるのでこれを読んでも少しでも「ムッ」となった人は『緋爛たるグランドセーヌ』を読むといいと思います。未来へ…26巻も出て人気漫画をいままさ紹介する必要がないのは重々承知ですが、栗栖さくららの話がインターネットで毎分毎秒されてない現状が自分にこの記事を書かせてくれました。あと栗栖さくら以外のキャラクターも普通に大好きなので栗栖さくらのお出番の留学先のクラスメイトに比べて少ないことに全然不満とかはない。全編ツヨ面白いのでは非読んでもてくださ。書く人 連絡先：thugraibu@gmail.com